トンデモ一行知識の世界

唐沢俊一

Shun-ichi Karasawa

ちくま文庫

ちくま文庫

トンデモ一行知識の世界

二〇〇二年五月八日　第一刷発行
二〇〇三年八月三十日　第三刷発行

著　者　唐沢俊一（からさわ・しゅんいち）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三　〒一一一―八七五五
振替〇〇一六〇―八―四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市北区櫛引町二―六〇四　〒三三一―八五〇七
電話番号　〇四八―六五一―〇〇五三
© SHUN'ICHI KARASAWA 2002　Printed in Japan
ISBN4-480-03724-1 C0195

ちくま文庫

トンデモ一行知識の世界

唐沢俊一

筑摩書房

まえがき

ジャイアント馬場の足は本当は十五文しかなかった。

パソコンについているマウスの移動距離の単位を「ミッキー」という。

♪タンタンタヌキの……の元メロディは聖書のヨハネ黙示録22―1からとった聖歌『まもなくかなたの』である。

コントラバスのことを中国語で「妖怪的提琴」という。

シラミのセックスは六時間、続く。

こういうものを、一行知識という。もちろん、一行でおさまらないものもある。一行というのは、三日天下の「三日」とか百円ライターの「百円」みたいな、短い、小さい、軽いなどの形容である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

当然、短くコンパクトにまとめられた知識であるから、その中に盛り込まれている情報には限界がある。たとえば、上記の例でいえば、ではジャイアント馬場が自分のキックを十六文キックと称していたのはなぜか、とか、マウスの移動距離に専門単位が必要なのか、それは国際基準なのか、いったい誰がそんな単位名を定めたのか、などという付随する疑問が山ほど涌くことであろう。

世の中には、こういう一行知識への不満から、自分で徹底した研究を始めてしまった方もいらっしゃる。雑誌『日曜研究家』を主宰する串間努氏がそれで、氏は一行知識が語らない部分を調べようと、ジュース、サイダー、ラムネ、ビスケットなど、日常の駄菓子類の徹底調査を進めるうち、昭和B級文化全般に対象のワクを広げ、そちらの研究で有名になってしまった。考え方によっては、一行知識の持つ不備こそ、串間氏にいまの名をなさしめた要因と言えるかもしれない。

だが、ここで私は一行知識を弁護したい。確かに一行知識が伝える情報には、限りがある。知の巨大な体系から見れば、一行知識など〝葦(よし)のズイから天井のぞく〟ようなものだろう。

実はそのもどかしさこそ、私のような一行知識マニアたちが、この奇妙な知の形式のトリコになっているところなのである。あたかも、それは中華料理の前菜で出てくるスイカの種が、食べる作業（歯で皮をかじって割れ目を入れ、それを指ではさんで広げて、舌でチュッ

と吸い出す）がメンドくさく、しかも食べることのできる中身が極めて少ない故に後をひき、とまらなくなる現象に似ている。のぞき穴からのぞく塀の向こうの光景は、そこからのぞける範囲が極めてせまいが故に、かえってこちらの好奇心を強く刺激するのと同じである。

ウッディ・アレンの短編小説に『蒸気機関何するものぞ』というのがある。動物病院の待合室で読んだ雑誌に載っていた一行知識の、

「サンドイッチはサンドイッチ伯爵が発明した」

という文章から、むちゃくちゃに想像力をかきたてられ、ついに何の知識もないままにサンドイッチ伯爵の一代記を書き上げてしまう、という話である。これはアレン自身、こういう一行知識のマニアだからこそ考えついたパロディではないかと思う。そう、見る人間によっては、一行知識のその一行には、百科事典ひと揃いを上回る、膨大な知識の体系が後ろに控えているところが想像できるのである。

この本は、そういう一行知識の魅力の持つナゾを探っていくことをテーマにできあがった本である。

私が一行知識の魅力に取りつかれたのは、まだ小学校の四年生か五年生のころだった。その当時、私は足を手術して、毎日、学校へ行く前に病院へ通院していた。親は薬局をやって

いたので、その店の配達用の軽トラックに便乗させてもらい、通っていたのだ。

その、軽トラックの運転席のカーラジオで毎朝、流れていたのがＴＢＳ系ラジオ局の、『話のアンテナ』という番組だったのだ。エイトマン（旧）のアニメでおなじみの高山栄氏のナレーションと、山崎唯氏の音楽で構成されるその番組は、〝耳で聞く一行知識〟とでもいうような、なんともユニークな番組だった。

「タヌキは銃声などが聞こえると、バッタリ倒れて死んだフリをします。そして、油断したハンターが近づくと、ムクッと起き上がってスタコラ一目散……これがタヌキ寝入りという言葉の語源です。でも、タヌキ君、本当は人間をだますつもりなど毛頭ありません。タヌキがひっくりかえるのは、とても臆病なため、銃の音が近くで聞こえると、一瞬、気絶してしまうのです……」

というような話の後に、短い音楽が入り、そしてまた別の話……という具合に、毎朝のテーマごとに、意外な話、聞いておもしろい話、知っていても何の役にも立たないが、ちょっと得をしたような気になる話などが、十五分程度の番組の中に、ギッシリ詰まっていたのだ。

私は、その番組のおもしろさに夢中になった。何しろ、ひとつひとつの知識がコンパクトだから、小学生にも簡単に記憶できる。そして、学校の勉強と違って、とにかく暗記が楽しいのである。

毎回のテーマは歴史上の人物のエピソードから医薬品の歴史、音楽、世界の風習などさまざまだった。中にはプロレスラーの話題、などという回もあった。

「〝殺人鬼〟という異名をとるレスラー、キラー・カール・コックスの意外な武器に、入れ歯があります。総入れ歯の彼は試合中にこれを外して、相手の頭をポカリ、とやるので嫌われているとか……」

このとき、私はこのキラー・カール・コックスというレスラーを知らなかったのだが、後に、彼の姿をテレビで見たとき、他人とは思えなかった。もう、ずいぶん前から彼のことなら何でも知っているような気になったものだ。もっとも、その試合では入れ歯は外さなかったけれど。

やがて、私が中学校に入ったころ、その番組『話のアンテナ』は、一冊の本にまとまった。ルック社というところから刊行された、『博学ものしり事典』（昭和四十七年初版）という本である。私はこの本を買い、それこそスリ切れるまで読んで、そのほとんどを暗記してしまった。そのころ、クラスの朝のホームルームで、毎日、今日のニュースを報告する、という決まりがあったのだが、めんどくさがって誰もこれを担当する者がいなかった。私はこれをひとりで買って出て、

「わが校の剣道部が、春の全国大会に見事出場が決定しました……ところで、剣道といえば

徳川三代将軍につかえた剣術指南、柳生但馬守にはペットのサルがいました。そして但馬守は、弟子入りを望む者には、まずこのサルに木剣を持たせて立ち会わせたそうです。サルに勝ったら入門が許可されたそうですが、半分以上の者がこのサルに負けたといいますから、かなりの腕前のおサルさんだったんですね……今日のミニ知識、提供はカラサワシュンイチでした」

などという、雑学トークをやっていた。この経験を通して覚えたことは、このような雑学知識は、単にその知識そのもののおもしろさばかりではなく、それを人に伝える、その語り口にもかなり左右されるということだった。ダラダラと説明が長すぎてもいけないし、また、ブッキラボーに知識だけを放り出しても、それはエンタテインメントたりえない。雑学というのは、落語や講談にも似た、一種の芸なのだな、と思うようになった。

これは、雑誌の一行知識なども同じである。もちろん、一行知識の法則として、それらは短ければ短いほどピリリとしたものになるが、基本となる知識に、必要最低限の装飾のコロモをつける。または、視点のヒネリをワンポイント、加える。この作業ひとつで、その一行知識は格段の差で〝生きて〟くるのである。

これを理解しないで、ただ知識を羅列してあるだけの、巷(ちまた)の雑学事典のたぐいは、読んでもさっぱりおもしろくなかった。この点、『博学ものしり事典』は、ラジオの『話のアンテ

ナ』の放送作家だった河村シゲル氏が執筆していたために、語り口（書き口）には絶妙のものがあった。また、一行知識収集のためむさぼり読んだ雑誌の雑学コーナーでも、たまにほかの執筆者と懸絶（けんぜつ）しておもしろいものを書く人がおり、その人の名前も、ちょっとユニークなのですぐ記憶してしまった。いまでは有名人の呉智英氏である。

『博学ものしり事典』一冊では、ネタはすぐ尽きてしまう。私は、それから書店をあさり、こういう雑学本と見ればとにかく、買いあさった。そして、おもしろいもの、おもしろくないものを徹底して分析してみた。

その結果、得た結論というのはこうである。

「一行知識は、それが実生活に無用のものであればあるほど純粋におもしろい」

よく、新聞社系の出版社や、ビジネス書系の出版社から出る雑学本がある。これらは、おしなべておもしろくない。いろいろ書き方に工夫があるものであってもである。その理由を考えているうち、こういうところから出る本は、その得た知識を、

「何か実用に役立てようという、不純な動機がある」

ことにあるのではないか、と気がついた。たとえば外回りの会社訪問での話題のきっかけ作りであるとか、入社試験の常識テストの参考書にする、とかいう理由で、生活のタシにしようと思って仕入れたとたん、雑学は実学となり、一行知識の持つ、無用な知識としての純

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

粋性は失われるのである。

雑学は、頭脳の細胞がその知識を増やしたいと欲する、その純粋な欲求のためにのみ、存在しなければならないのである。

ＳＦ作家で化学者、そして雑学マニアでもあったアイザック・アシモフ博士は、自身ものした一行知識の本の中でこう言っている。

「人間は、無用な知識の数が増えることで快感を感じることができる、唯一の動物である」

一行知識ファンであることを表明することは、人間としてのアイデンティティを確立させることでもあるのだ。この本で、あなたも自分が人間である、ということを再認識していただきたいと思う。

唐沢俊一

もくじ

まえがき 3

プロローグ 一行知識収集記 17

第1章 モノと動物に関する一行知識 57

ゴキブリの語源は「御器かぶり」である。 58

グリコの「POCKY」は、英語で訳すと「あばたちゃん」となる。 64

モンゴルでは羊を食欲のほかに性欲の解消にも使っていた。 68

A型の血は甘いので蚊に好まれる。B型はまずいので好かれない。 73

カンヅメはナポレオンが考案させた。 78
竜は角でものを聞く。 83

第2章 ココロとカラダに関する一行知識

古代日本では
セックスは女性の騎乗位が一般的だった。 92
犯罪者がもっとも好む色は赤。
緑、青、黄がそれに次ぐ。 98
花見などで人が浮かれるのは、桜の花粉に
覚醒剤に似た成分が含まれるためである。 103
半導体ダイオードを頭にハリつけると
病気が治る。 108

ＡＢ型の人間は多重人格者が多い。 112
「猿は人間より毛が三本足りない」というが、実際にはほとんどの猿が人間よりずっと毛深い。 118
患者は手術で切除された自分の体の所有権を主張することができる。 122

第3章 伝説に関する一行知識

ロスチャイルド家の家訓は「一に貯金、二に貯金、三に貯金」である。 128
ソクラテスの弟子たちはソクラテスの肉体を求めて争った。 135
「同志」は香港では「ホモ」の隠語である。 141

雪男の子孫が日本にいる、
という説を唱えた人物がいる。 145

男の残虐ナンバーワンは
スペインの初代宗教裁判所長トルケマダである。 150

悪女の世界ナンバーワンは
イタリアの大富豪カトリーヌ・ド・メディチである。 155

メンソールタバコを吸うとインポになる。 161

『銀河鉄道の夜』は宮沢賢治が霊視したものを
そのまま書いた小説、という説がある。 172

第4章 クスリと病に関する一行知識

シャーロック・ホームズはコカイン中毒だった。 180

フランスやイタリアの貴族は健康食としてシラミを食べていた。 186

中国人はオブラートを使わない。 192

ユンケル黄帝液は水商売の人の口コミで大ヒットした。 197

昭和三十年代に「頭のよくなるラーメン」が出た。 202

人間はもともとでんぷんを消化吸収できない体質の動物である。 206

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com